

小論文		十四時三〇分～十六時〇〇分（一時間三十分）
問題文は、二枚目以降に記載（ただし、試験開始の合図があるまで見ないこと。）		
注意事項	■試験開始前の注意 一. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の二枚目以降を見ないこと。 また、解答用紙にも手を触れないこと。 二. 受験票は、監督者から見えるよう机上札の横に置くこと。 受験票を忘れた場合は、受付で仮受験票の発行を受けること。 三. 筆記用具以外の筆箱・ペンケースなど、私物はすべてかばんの中に片付けること。 四. 試験用具の貸し出しは一切いたしません。 五. 携帯電話を使用することは、時計・アラーム等の用途を問わず、禁止します。必ず電源を切り、かばんの中にしまってください。 ■試験開始後の注意 一. 試験開始後、問題用紙および解答用紙類の印刷不鮮明な箇所、落丁、乱丁、汚れ、不備などに気がついたら、手を挙げて監督者に知らせること。 二. 解答用紙裏面の所定欄に受験番号・氏名を記入すること。 三. 試験開始後は、試験終了時刻まで途中退室できません（お手洗い等を除く）。 四. 質問がある場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。質問は試験終了十五分前まで受け付けます。それ以降は受け付けません。 五. 試験中にお手洗いを希望する場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。その際は、他の受験生の受験を阻害しないように注意すること。 ■試験終了時の注意 一. 試験終了後は、問題用紙のみ持ち帰ってかまいません。解答用紙を提出せずを持ち帰った場合は、試験放棄とみなします。 二. 試験終了後は、受験票その他の忘れ物に注意すること。	
用紙	（問題用紙）本冊子（本紙を含む） 四枚 （解答用紙）原稿用紙 一枚 （下書用紙）A4白紙 一枚	
使用可能用具	筆記用具（鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム、鉛筆削り）	

【問い】

以下の文章は、『創るセンス 工作の思考』（森博嗣／集英社新書）の一部分です。読んだうえで、次の問いに答えてください。

- (一) この文章を、四〇〇字以内で要約してください。
- (二) 文章の全体を読み、感じたり刺激を受けたりした内容も示しながら、あなたが「作ることの凄さ」について考えてきたことを、具体的な経験をふまえて四〇〇字以内で記してください。

解答用紙は、縦書きで使用する事。

【課題文】

◇何故そこまで仕上げるのか

ものを「作る」ということは、自分の思考を外部へ出す（アウトプットする）行為であり、それは少なからず「他者」の存在を意識したものであるはずだ。たとえ、自分のために作る場合でも、今の自分ではなく、将来の自分に向けたものであったり、あるいは、架空の人格であったり、つまり「今の自分以外の者」という意味で、やはり「他者」と解釈することができる。純粋に今の自分だけのためならば、わざわざ外に出して形にする必要はない。形にしなければ思考できない、というならば、スケッチなり簡単な「試作」「習作」で済むはずである。僕が、自分の工作はすべて試作だと感じていたのは、実はこの理屈だった。

作ることが、他者へのサービス、あるいはメッセージを元来含んでいることは、たぶん確かだと思う。

「自分の内側へ向かって」と書いたし、また、「完成品は残骸だ」とも書いたけれど、根本的な概念として、「作る」から「他者への指向性」を完全に取り除くことは不可能だろう。

たとえば、模型飛行機の仕上げ作業をしているときに、僕はそれを何度も感じた。ぴかぴかになるように、滑らかになるように、とサンドペーパーで削っている作業の間、「これは、誰のためにしているのか？」と考える。飛行性能だけならば、もう充分だ。また、これを見る人たちのためだとしても、こんな箇所まで仕上げることはない、それなら見える部分だけで充分だ。すると、自分のためだろうか？しかし、自分のためならば、こんな労働時間は無駄ではないか。そろそろ解放してあげて、もっと自分の得になる別のものへ目を向けるべきだ。この仕上げ作業を続けても、このさきどうなるかは既に想像できている。そのとおりになるだけだ。

そう考えながらも、しかし、手が止まったことは一度もない。その「想像どおりのもの」へ少しでも近づきたい、という気持ちが抑えられなかった。結局は、想像したとおりへは行き着かず、不満が残る結果が待っていることが多い。それでも、そこへ行きたいのである。

◇工作の神様

そうなる、もう考えられる理由というのは、一つしかないだろう。誰かもの凄い評価眼の人が現れ、これを見て、僕のしたことを褒めてくれるのではないか、というものだ。けれど、そんな現実はないことを僕は理解している。他者の目は、僕の目よりも行き届かないはずだ。こんな箇所まで見てはくれない。そもそも、実際に誰かから評価をされても、それで自分の感情が影響されるようなことは、過去になかった。褒められてもそんなに嬉しくないし、貶^{けな}されてもそんなに悔しくない。それはやはり、自分の評価の方がずっと正確だという確信があったからだ。

となると、いったい誰のどんな評価を期待しているのか。

僕は、それを「工作の神様」と呼ぶしかない、と考えるに至った。子供のときに、そう結論したのである。工作の神様が褒めてくれるだろう、という気持ちとともに、きつと微笑んでくれるだろう、つまり、神様に喜んでもらえる、とイメージした。これは、普段、工作が下手な僕のことを心配してくれる神様への「恩返し」あるいは「孝行」みたいな感じなのだ。

工作を50年近くも経験した今では、この工作の神様は、結局は自分自身のことなのだと理解している。自分は誤魔化せない。誤魔化しのない目を持った自分は、失望を繰り返し味わった。その自分をなんとか喜ばせたい。そういう素直な気持ちである。「神様孝行」という言葉が「自分孝行」に同化しただけだ。

僕が神様だといっているのでは全然ない。僕は本当に工作が下手くそで、まったく才能がないのだ。それでも、そんな僕を神様は見捨てずに見守ってくれるし、僕なりの努力をちゃんと評価してくれる。これは、信仰だろうか。あるいは、そうかもしれない。しかし、「ものの作りのセンス」を支えるもの、その根本的な精神とは、結局はそれぞれの個人が持つ工作の神様への信仰だ、と僕は考えている。

こういったことを分析し、言葉で表現した人はあまりいないだろう。言葉にすると、「神様」なんて滑稽^{こっけい}な表現になってしまいがちだ。しかし、人に通じる言葉でなくてはいけない。格好をつけるために書いているのではないのだ。言葉を尽くすことも、また工作と同じである。

◇「凄さ」が伝わる

工作を紹介したインターネットのサイト、そして日々の工作を楽しく綴^{つづ}ったブログも数多い。それに「神様」がいることが感じられる。というか、そういう「神様」を感じさせる工作者は、揺るぎがないし、傍^{はた}から見ても「凄い」と感じるものがある。上手い下手というよりも、大事なのはこの「凄さ」なのだ。

最終的に周囲の人に影響を与えるものは、技術的な高い低い、上手い下手ではなくて、「凄さ」なのだと思います。いろいろな要素が、その「凄さ」に関わってくるけれど、これに触れると、もう自分でも

なにかしないと気が済まない、という思いに駆られる。「凄さ」がひしひしと伝わってきて、本当に痺れてしまう。痺れたら最後、自分も少しでも凄いことをしてみたい、といっても立ってもいられなくなるのだ。

この連鎖こそが、人間の力ではないかとさえ思う。「教育」だって、基本はここにあるはずだ。人に伝えられるもの、影響を与えられるものを、大事にしなければならない。凄い大人がいれば、子供はすぐにそれを見つけて、集まってくるだろう。子供の好奇心は、常に人間の凄さを探し求めている。自分になりたいと思えるような凄い人を見つけようとしているのだ。それが「若さ」というものだと思う。だからこそ、僕はこの歳になっても、まだまだ人間の凄さに出会いたいし、もちろん自分の中にも、少しでも凄さを見つきたい。そう願っているのである。

というわけで、結論としては、創作が産み出す価値とは、「人間の凄さ」である、ということになる。抽象的な表現で申し訳ないが、これ以上に適切な言葉を思いつけなかった。ご理解いただけただろうか。一度でも「凄さ」を感じたことがあれば、「ああ、そうそう」と頷うなずかれることと思う。それは、工作に限らず、どんなジャンルでも見つけることができるし、人間が人間に憧れるメカニズムはすべてこれだといえる。天性の凄さもちろんあるけれど、大部分の凄さは、日常の中で、こつこつと少しずつ作られたものであることに注目してほしい。それは、きっと貴方にもできる。

ものを作ることは、「凄さ」を見つけること、「凄さ」を形にすることである。